

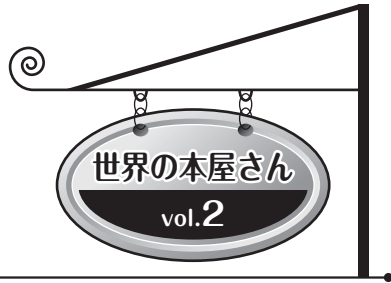
ほんのしるべ

# 書標

2012.  
2月号

2012年2月5日発行(毎月1回5日発行)  
通巻399号 昭和61年7月15日第三種郵便物認可





## 台中・誠品書店

ノセ事務所

熊勢 仁



台北の中央駅から新幹線高雄行きに乗れば十分で台中駅に着く。街中の中友百貨店の十、十一階に誠品書店がある。誠品書店は台湾全土に四十数店を持つチェーン書店である。

店数では台湾で二〜三番目であるが、店格、品揃え、サービス、信用では台湾一である。旗艦店は台北・新義店であるが、筆者

は台中店を紹介したい。この店の圧巻は階段状の円形広場、円形壁面に並べられた本の迫力である。回廊状の売場もなかなか味わえない店内風景である。この店は十、十一階を四層に分けて使っていることも面白い。店舗中央の円形広場にある階段は読者の座り読みの場所であり、コミュニケーションの場でもある。



## 『動的平衡2』

生物学者 福岡 伸一



生命を生命たらしめているもつとも重要な特性は何か。生命は絶え間なく動いている。細胞や分子のレベルで常に分解と合成を繰り返して、自分自身を入れ換え、更新しつづけている。このありようを私は、生命は動的平衡にある、と呼びたい。そして、このことこそが生きているということの本質だといった。生命は動的平衡にあるから環境に適応でき、干渉を跳ね返し、病気や傷から回復し、欠落を補うことができる。自らを分解しつづけることは、秩序を無秩序化しようとする自然の動き（エントロピー増大の法則）に対抗して生きながらえる唯一の方法でもある。

私たちは現在、生物をミクロな分子部品から構成された精密な機械だとみなしている。それゆえにパーツを交換すれば細胞がより効率よく働くと考えて、遺伝子組み換えを行い、プログラムを初期化すれば再生が可能だと考えている。

しかし機械論的なものだと生命を見なすと様々な錯誤が生じる。生命体において、あるひとつのパーツは電子部品のようになり、あるひとつの機能を担っているわけではない。他のさまざまなパーツと協働してはじめてある機能を担っている。ゆえに、ひとつのパーツをスペック的に向上させても、全体がよくなる

わけではない。むしろひとつパーツの突出は、他のパーツとの協働を乱すがゆえに、全体の悪化につながる。

このような観点から、私は、あまりにも機械論的な見方から偏りすぎた現在の生命観を、動的平衡の観点から捉えなおしたいと考えるようになった。それは私自身が、分子生物学者として、ずっと生物をミクロなパーツの組み合わせとして見てきたことへの自省を込めてのことである。

今回上梓した『動的平衡2』（木楽舎）は、二年前に刊行した『動的平衡』の続巻で、動的平衡というコンセプトをより深く考えた本となっている。

もっとも強調したい論点は、「生命よ、自由であれ」ということ。生命体は非常に大きな制約のうちにあると考えられてきた。その最大のもは遺伝子である。遺伝子が私たちの姿かたちを決め、遺伝子が私たちの体質を決め、遺伝子が私たちの得手不得手を決め、遺伝子が私たちの行動を決める。進化生物学者リチャード・ドーキンスは、私たちの身体は遺伝子の乗り物にすぎない、といった。そして遺伝子とは自らが増えること（複製されること）を唯一の目的とした利己的なものだと言明した。

しかしこれはほんとうなのだろうか。遺伝子万能論を脱し

て、生命のもつ自由度について考えてみたのが『動的平衡2』である。

ヒトとチンパンジーのゲノムを比較するとそのほとんどが同じで、わずかな差しかない。ヒトにあるA、B、C、Dという遺伝子は、チンパンジーにも同じようにある。

ではいったい何がヒトをヒトたらしめるのだろうか。それはおそらく遺伝子のスイッチがオン・オフされるタイミングの差なのである。

同じA、B、C、Dという遺伝子を持っていても、遺伝子はあくまで情報であって、実際の作用をもたらすことはない。作用をもたらすのは遺伝子を作り出すタンパク質である。だからAという遺伝子のスイッチがオンになる、というのはA遺伝子からAタンパク質の製造が開始され、Aタンパク質が細胞の内外で作用を発揮するタイミング、ということになる。もし、C遺伝子を作り出すCタンパク質が、生物の第二次性徴を促す重要な性ホルモンだとすれば、いつC遺伝子のスイッチがオンになるかによって、その生物が生後、どれくらいで性的に成熟し、生殖行動を開始するかが左右される。

最近になってたくさんさんの遺伝子（たとえば数百とか数千）がどのようなタイミングで活性化されるか（スイッチがオンになるか）を同時に解析できるようになった。

そのようなデータがすこしずつ集積されてくると意外なことがわかってきたのである。

脳でスイッチがオンになる一群の遺伝子は、チンパンジーよりヒトで、作用のタイミングが遅れる傾向が強い。つまり脳のある部位に関していえば、ヒトはチンパンジーよりもゆっく

り大人になる。ヒトはチンパンジーよりも長い期間、子供のままでいる。そういうことになる。

このことは進化上、意外な有利さがあった。子供の期間が伸びるといえるのは、それだけ、自由であるということ。おそれを知らず、警戒心を解き、柔軟性に富み、好奇心に満ち、探索行動が長続きするということである。また試行錯誤や手先の器用さ、運動や行動のスキルを向上させる期間が長くなるということでもある。つまり学びと習熟の時間がたつぷり得られることになる。一方で、性成熟が遅い、ということは縄張り争いや順位づけ、メスの取り合いやオス同士の闘争などが、起りにくい、つまり攻撃性が低いということでもある。ここでも自由度が増した。このことこそが知性の発達に手を貸すことになった。この自由度は、世代を超えて受け継がれる。『動的平衡2』は自由の視点から見た文明論の書でもある。ステイブ・ジョブズの本にあやかって、『動的平衡』『動的平衡2』を白・黒のデザインとした。ぜひ応援してください。



『動的平衡』『動的平衡2』  
木楽舎・各1,600円



## 『フットボール・ラブ』

小宮良之著

集英社・一〇〇〇円

二〇一一年十二月十七日に開催された、サッカー天皇杯、松本山雅FC―横浜F・マリノス戦。一部と三部のアンバランスな対戦は、しかしそれに似合わぬ熱狂と、異様な雰囲気込まれていた。両チームのサポーターは試合前、揃ってたった一人の選手の名前を叫ぶ。「ナオキ、ナオキオレ!」  
「松田直樹、松本の松田直樹、俺たちと、この街と、いつまでも!」

本書は、昨夏に急逝した元日本代表・松田直樹を筆頭に、「サッカーを諦めない」八人の男たちを追ったルポルタージュである。彼らの生き方は様々だ。日本代表として日本サッカー界の頂点を極め、一度は戦力外通告を受けながらも現役にこだわり続けるDF田中誠。将来を囑望されながらも芽が出ず、J2からの下克上を狙うFW豊田陽平。海外へ活路を見出し、日本を飛び出したFWカレン・ロバート（いずれも取材当時）。彼らは皆、一度は選手として崖っぷちに立たされながらも、決してサッカー

から離れようとはしない。そこにあるのは、プロの意地と執念。そして誰よりもサッカーを愛しているという誇りだ。

そして、松田直樹である。横浜の誰もが愛し、松本をJリーグに導くために闘い、そして病魔に倒れた魂の男。本書は彼のサッカー人生と、死の瞬間に至るまでを、詳細な取材により克明に綴っている。「俺、マジでサッカー好きなんすよ」と叫んで横浜を去った男は、最後までサッカーを愛したままその生涯を駆け抜け、そしてなお走り続けている。

彼らのサッカー人生に終わりは無い。ここにサッカーがある限り、彼らは闘い続ける。俺たちと、この街と、どこまでも――。

(右)

## 『刑務所の経済学』

中島隆信著

PHP研究所・一四七〇円

裁判員制度導入から約三年が経過した。量刑に対し市民感覚が取り入れられ、被害者感情にもっと配慮した判決が期待されている。

重い犯罪を働いた者には重い量刑を課し、これ以上社会に害を及ぼさない様、刑務所での収容期間を長くし、後は専門機関にま

かせておけば……と何となく思っていた。

著者は『障害者の経済学』『オバサンの経済学』等、著書発表の度に経済学的視点からの分析が話題になってきた。

いくつか気になった内の一つは、矯正官署の予算額を、刑務所の一日平均収容者数で割ると、一人当たり一年約三〇〇万円掛かっているという事だ。また、著者がある刑務所で聞いた憲法二十五条が守られている場所は刑務所だという言葉。生活保護費の月額が十数万円である事を考え合わせると、税金や社会保険料を払っている身としては複雑な気持ちになる。著者も、刑務所に収容される事で失われる労働力・それに関わるコストの問題と、刑罰による様々な効果（犯罪抑止・犯罪無力化・応報効果等）とのバランスの重要性和困難性を述べている。司法をコスト分析だけで論じる事は出来ない」と本書の中で何度も述べられている。だが出所後、社会復帰出来、労働力として納税等社会に貢献出来る仕組みにしないと、今の制度ではコストが掛かるだけで、しかも有効に使えていない。

刑事政策の場に経済学的視点が必要だという著者の意見は専門外と捉えられるだろうが、全く無視してもいいのだろうか。(左)

## 『構造と生成 I カヴァイエス研究』

近藤和敬著 月曜社・三七八〇円

レジスタンス活動の結果四十一歳でナチスに処刑された数理哲学者ジャン・カヴァイエスの、本邦初の研究書。著者近藤によれば、カヴァイエスは、現代フランス哲学に大きな影響を与えた、「ミッシングリンク」といべき存在である。

カヴァイエスにとって、数学だけが唯一、真理の経験を可能にし、真理をこの世界で主題的に現実化することを許されている。それゆえ彼は、合理性の問題を根本からかかんがえなおすために、みずから進んで困難を極める現代数学の分析へと進んで行ったのだ、と近藤は言う。

だが、カヴァイエスは、数学の世界に沈み込んだわけでは決してない。数学者が「地面のしたに潜り真理を発掘」し、超越論的哲学者が「空のうえから真理のはてを俯瞰する」のに対し、概念の哲学者は、そのあいだにあって、「その運動それ自体を生け捕り」にしようとする。

重要なのは、必然的で超越的な数学的真理が「すべてを一挙に開示するしかた」ではあたえられず、われわれが「現に手にしている真理から出発して、新たな真理を獲

得する」こと、そのことが絶えず、終わることなく続いていくことである。

その突然の死によって中断されたカヴァイエスのプログラムは、豊饒な可能性へと開かれ、実際、陽に暗に彼を参照する多くの名だたる哲学者によって引き継がれていった。そのことを知悉しながら、本書においては敢えて徹底してカヴァイエス自身のテキストに踏みとどまる近藤の思索も、同様に豊饒な可能性へと開かれ進展していくことが期待できる。

(フ)

## 『感じる科学』

さくら剛著

サンクチュアリ・パブリッシング・一三六五円

単純に教科書をなぞるだけの授業より、脱線の多い方が楽しかったし、しかも脱線部分と本筋が巧妙に絡められていた無駄話の方を鮮明に覚えている。こういう感じは多くの方に賛同していただけるのではないかと思う。特に苦手な教科や何だか分からない話であればあるほど、そういう傾向は顕著になる。

知識を身近な話題にまで落とし込んで話そうと思えば、十のものなら百を知っている必要がある。その知識の深さと広さがある

るからこそ、脱線先生の授業は面白く、興味のない分野であっても話そのものを楽しませてくれるのだ。

本書を読んでいると、この感覚を思い出す。というか、毎時間が無駄話ばかりで「ああ、またこんな話でチャイム鳴っちゃったよ」と頭をかきながら教室を後にする先生の姿が浮かんでくる。その背中の妙なかつこよさも。

扱っている題材はサイエンス。理系や数学がブームとなり、超光速や素粒子物理学が話題になっているとはいえ、まだまだハードルの高い分野だろう。時間は相対的なもので素粒子は同時に色々な場所に存在している宇宙は未知の物質ばかりなり……本格的に理論や数式を用いて説明されても安らかな眠りに落ちてしまうが、力技であっても「要するにこういうことだ」と笑わせてくれれば、何となく納得できた気分になるし、何よりも興味を持つことができる。

先生とは先に立って生きている人のことだという。だとすれば、本書は科学エッセイとして読むのもちろんのこと、新たな興味を得るために、この若干ユルすぎる先生に師事する教科書としても十分に期待に応えてくれる。

(一一)

特集

# その日の前に



## 特集に先だって

今回特集を書くに当たり「がん」をテーマに決めたのは、全く個人的な理由からだった。

昨年四月、母方の祖父が「肝臓がん」だとわかった。梯子から転倒し入院した際の検査で、偶然見つかったのだ。すでに相当な大きさとなっていて、持つて半年だろうと告知された。

家族は寝耳に水、転倒が原因の脳出血と半身マヒだけでも大騒ぎしていたのに、まさか「がん」だとは。あんなに健康に気を使って、定期検診も受けていたのに。なぜ……？

それまで「がん」とは遠い世界の特別なものだと思いこんでいた自分に、知識など全くなかった。病院も介護も何もかもが未知の世界、必死で看病する両親・叔父・叔母を見ながら、とまどうばかりで一つも役に立たない。できることは、通院の送り迎えや、顔を出して励ますことくらい。どうなるのか分からない不安と情けなさで、無駄に考え込んでしまうだけだった。

本人の努力、家族の介護が実り、祖父は現在、自宅で生活している。週三日デ

イケアにも通っている。自分の足で歩き、ご飯も沢山食べ、よく笑う。しかし、診断によれば「がん」はいつどうなってもおかしくないほどの状態だという。高齢の祖父には手術も強い抗がん剤の副作用も厳しいと予想されたため、「がん」に対する具体的な治療は今後行われる予定がない。こんなに元気なのは奇跡のようだ、と掛かり付けの医者は言う。

これから自分たちができることは何なのか？ 祖父にとつて、一番適した治療・看護・生活とは？ 誰がどう判断決定していくべきなのか？ 自分の立場から今後を考えてゆこうとしたとき、「がん」について基礎的な知識を持つことが必要ではないか、と思うようになった。そして本来、前もって知るに越したことはない。

本稿では、難しい専門書を除き、家族・周囲の立場から有益だと思える書籍について、紹介する。浅薄な知識で語ることに恐怖もあるが、自分自身のように「がん」や病気について考えたことがない方にも、小さなきっかけになればと思う。

## 知る第一歩・入門書

家庭医学のコナーでも、がん関連本はかなり多い。最初の一步として、簡潔に病気について書かれたものを選ぶとすれば、専門的な医学書コナーよりも家庭医学が適している。

『がんの早期発見と治療の手引き 第三版』（小学館・小川一誠・田口鐵男監修・二六二五円）と『改訂版 最新「がん」の医学百科』（主婦と生活社・向山雄人監修・一九九五円）は、どちらも一般向けに臓器別がんに関する基本的な説明・診断方法・手術方法・最新の治療方法・保険・緩和ケアに至るまで網羅し、まとめられている。図解も多く、分かりやすい。どちらか一冊でもあれば、まず知っておくべき事項が検索できるだろう。『ここが知りたい がん診療Q&A』（永井書店・大阪府立成人病センター編・二九四〇円）は、がん診療に携わる人のためにという副題が付いているように、専門用語も使われている医療従事者向けの本だが、構成は前出のタイプに近く臓器別に分かれていて言葉も難しすぎず読みやすい。

『健康ライブラリー』シリーズ（講談

社・各一二六〇円）はがんに限らず、子供の発達障害など様々な病気について、イラストを主に分かりやすく解説し、ロングセラーとなっている。表紙をあけてすぐの見返し部分に「主なポイント」として概要があるのも親切だ。がんは臓器ごと、また治療法ごとに多数発行されている。

『病院&介護大事典』（ダイヤモンドムック・八八〇円）『病院の実力 がんに克つ』（読売新聞社ムック・六五〇円）など雑誌形式のムック本は、手術実施数等に基づく地方別病院ランキングや時期ごとの最新治療についてまとめたりリアルタイムの情報を知る時に便利だ。



『患者必携 がんになったら手にとるガイド』

国立がん研究センターがインターネット上で公開している情報を書籍化した『患者必携 がんになったら手にとるガイド』

ド』（学研メディカル秀潤社・国立がん研究センターがん対策情報センター編著・一二六〇円）は、がんの解説はもちろんで、がんと分かってからの心がまえなど、がんどのように向き合うか、という精神面のアドバイスが書かれていることが特徴。付属して「私の療養手帳」という冊子がつき、実際に治療を受ける患者としての立場を想定して作られたことが伺える。

これらの本は、がんについて知るだけでなく、実際に治療を受ける際に必要なことを書いてある点で、まさに実用書といえる。だが、患者や家族が治療方針を決定していくためには、もう少し踏み込んだ知識が欲しくなる。

『別冊日経サイエンス160 がんを知り、がんを治す』（日経サイエンス社・一九九五円）『ニュートン別冊 図解がんと免疫』（ニュートンプレス・二二四二円）は、いずれも次項目で書く「がんの発生」について、CGやイラストを使って視覚化している。読むだけでなく見て分かりやすい作り方がされている点で、入門書としてふさわしい。

## がんとは何か

がんについて考えるとき、初めに浮かぶのは「そもそもがんとは何なのだろう」という根本的な疑問ではないか。いつの間にか得た「不治に近い病気」というぼんやりとしたイメージはあるが、当事者になってみなければその詳細を知ること、情報をかき集めることもほぼない。がんはどのようにして発生するのか。

ロバート・ワインバーグ氏はがん遺伝子の研究で知られ、がん治療の最前線にいる人物だ。



『裏切り者の細胞  
がんの正体』

『裏切り者の細胞がんの正体』（草思社・ロバート・ワインバーグ著・一七八五円）は、まずがんについて全く未知であった時代から、発がん物質による発生説、がんウイルス説など仮説に基づいた実験が行われ、検証されるようになった十九世

紀以降のがん研究の流れを説明し、現在わかってきた腫瘍が発生する過程、最新の遺伝子研究の成果、今後の治療法についても詳しく説明を加えている。専門的内容も含むが、文章中で上手く解説されているため、分かりやすい。この本を読み、人間自らが持つ遺伝子が条件により変質し、がん遺伝子となることを知った。遺伝子と、がんを発生させるメカニズムとの関係性を明らかにしてゆくことが、発生を食い止める手段になるはずだ、と本書の最後で著者は語っており、最先端の医学研究が進めばいつかがんは治るという希望が読み取れる。だが、発行から約十年後、あるドキュメンタリー番組で氏は異なる見解を示した。



『がん  
生と死の謎に挑む』

「人類は本当のところ、どこまでがんを理解しているのか。そこを知りたいと

思った」家族・友人・さらに自らもがんになったことをきっかけに、世界のあらゆる場所まで赴きその疑問を追究したジャーナリスト・立花隆氏。彼のドキュメンタリー番組が二〇〇九年にNHKで放送された。『がん 生と死の謎に挑む』（文藝春秋・二五二〇円）は、番組そのものを収録したDVD、内容の補足となる講演会・雑誌発表の手記・番組台本等を含む書籍をセットにしたものだ。映像で解説される最新医療は視覚化されていて、非常に分かりやすい。また、診察の様子・闘病生活をカメラに晒す立花氏の姿が生々しい。氏の歩みは、スケールは違えど、多くのがんに関わった患者や家族の歩みと重なる。関連書を読み、学会や勉強会に足を運び、医者や医療関係者に話を聞き、疑問を呈し、進む道を模索する。先述のワインバーグ氏とも面会を果たし、現在のがん研究について聞いているのだが、その過程で、立花氏は驚くべき事実と直面する。何十年もさかんに行われているように見えたがん研究が、実は未だ先の見えない未知の領域であるという事実である。番組からワインバーグ氏の言を引用すると「どんなにがんの

原因を究明しても、がんを完全に取り除き、がんを治すということは想像以上に複雑で難しいということだったのです」

番組は、様々な研究者を訪ね最新医学を紹介しながら、代替療法・緩和ケアへと進んでゆく。

自身の細胞・遺伝子が原因で発生するがん。複雑で説明が困難な状況で、患者一人一人はどのようにしてゆけばいいのか。そして、どの病院へ行き、どんな医師に相談し、どんな治療法を受ければいいのか。何を探し、求めてゆけばいいのだろうか。

## 病院・医療とは



『病院で死ぬということ』

『病院で死ぬということ』（文春文庫・山崎章郎著・五三〇円）は、一九九〇年発表されてベストセラーとなった。一方的に施されるものとして存在してきた医

療への内部告発ともとれる一冊だ。著者が自らの現場体験等を元にして創作したフィクションを、本文に交えている。

冒頭から、告知のないまま、本人の意思を無視した形で行われるがん治療の話、新人医師の練習台として死を目前とした患者に施される蘇生術の話など、ショッキングな描写が続く。これは架空の形をとっているが、実際に医療現場で行われているのだ、という言葉に驚き、恐怖する。著者は医師として進む道を、個人を尊重する緩和ケア・ホスピスへと向かう。

それから数年後に発表され論争を巻き起こしたという『患者よ、がんと闘うな』（文春文庫・近藤隆著・五七〇円）。著者自身が提唱する放射線治療の効果について力説しながら、当時主ながん治療法であった手術・抗がん剤治療に真つ向から疑問を投げかけ、実質一、三カ月ほどの延命効果のために強烈な副作用を伴う治療が必要か、と患者に呼びかける。断定的な言葉の使い方など、反発も招きやすい本だが、根本の主張は、「患者は言いなりにならず、自ら治療法を選べることに気づけ」というメッセージだと読み取れる。



『患者よ、がんと闘うな』

この二冊から学ぶことは、知識がないからと言われるがまま病院や医師に身をゆだねることは、最善ではないということだろう。一人一人に適した医療の提供、という理想の形には遠い現状で、自分についてよく知っているのは、自分自身であり、またそばにいる家族なのである。そこを疎かにして最新医療、最高レベルの医療施設、有能な医師を求めても、結果として自分に適しているという保証はどこにもない。患者も家族も、自ら考え、選択するという苦しみと権利を同時に背負う覚悟が必要となる。

## がんと心・緩和ケア

がんと向き合い続ける患者・家族の心理的負担は、計り知れない。そのケアは十分に行われているのか。『ルポ がんの時代、心のケア』（岩波書店・上野玲著・

一七八五円）は、全国の医療現場、ケアの向上を試み携わる医療従事者、患者本人や家族にも取材をして書かれた本だ。



『ルボ がんの時代、心のケア』

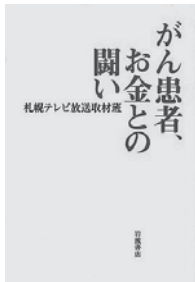
かつて技術で医療を施すことが第一だった現場から、手術後の精神面も含めた個々の患者に対してケアへと向かいつつある変化が感じられる内容だ。全国で緩和ケアを行う病院リストも掲載されている。

また誤解されがちな「緩和ケア」について『がん緩和ケア最前線』（岩波新書・坂井かをり著・七九八円）を読んで認識が変わった。がんを「完治させる方法が無くなったから」痛みを緩和するのではなく、「がんと診断された時から今現在患者が感じている苦痛を取り除く、和らげる」とこそが緩和ケアである、というのだ。病気の痛み、苦しみは側にいるだけで

も辛く苦しい。少しでも取り除いてあげたい、代わってあげたいと思うほどだ。それを軽減する技術はどんどん進化しているというが、行われる病院の少なさ、今までの治療方法との連携、患者や家族の理解の難しさなどから、全国的に普及されるには至っていない。普及には国や行政の支援だけでなく、受ける側の知識や理解を深めることも重要である。

## がんと費用

医師の診断を受け、自らも調べ、セカンドオピニオンを受けた後、今後の治療方針を決定したとする。次は長期にわたる高額の治療費をどう工面していくか、という切実な問題が発生する。



『がん患者、お金との闘い』

は北海道のがん患者・金子明美さんの闘病生活、がん対策に関わる活動を取材したテレビドキュメンタリーを元とする。本文内では金子家の息も苦しくなるような経済状況が明らかにされている。

金子さんの場合、本書冒頭、通院して抗がん剤治療を受けると一回約五万円、月に二回通って十万円、「高額療養費制度」という制度を利用すれば、一定額以上が払い戻し（長期化するほど自己負担も減額）されるが、払い戻しは三カ月後にしか行われない。「生活保護」も一定の収入以下でないとして受けられず、夫一人の収入で生活する金子家もわずかに下回らない。がん保険でも各社条件が異なり、通院を保険の対象とする会社は少ない。病状が悪化し、医療費が高くなるほど、窓口で支払うための資金繰りが苦しくなっていく。

手術・入院だけでなく、通院で治療を受ける患者が増加しているがん治療の現実に、国の補助対策が追い付いていないと、金子さんだけでなく多くの患者が声をあげて訴えるが、対策は地方自治体によって差があり、また国の対応は遅く、苦しんでいる患者の救済に間に合わない

『がん患者、お金との闘い』（岩波書店・札幌テレビ放送取材班著・一六八〇円）

い。他人事と考へ、実情を知らない国民の関心の低さも、制度改革に影響を及ぼしているという。

家族に大きな負担を負わせる自責にかけられ「生きていていいのかな」とこぼす言葉に、悔しさと悲しさがにじみ出る。生活をがんに変えられた、切実な患者の声が伝わる本である。

がんを患って治療する場合、自分が支払う医療費の額、適応される制度等を細かく調べ、把握し、徹底して活用することが重要である。実際のケースを元に、参考になる本を以下に挙げていく。



『がんとお金の本』

『がんとお金の本』（ビーケイシー・黒田尚子著・一五七五円）は自身ががんとなったFP（ファイナンシャル・プランナー）の著者が、がんにかかる費用を算出できるアドバイス、公的制度やがん保

険の上手い活用法を事細かに書く。全体が読みやすく、実用に耐える内容になっている。

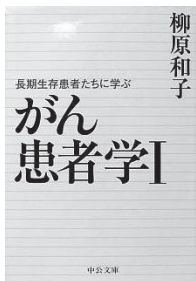
『親ががんだとわかったら』（文藝春秋・はにわきみこ著・一三〇〇円）は、小さなテーマ（情報収集・病院選び・代替医療体験など）ごとに見開き一ページでシンプルに経緯・結論がまとめられていて読みやすい。著者の父親ががんになった経験が元にあるため、説得力と実用性が高い。基本の文章が明るいのもずっと読めて良い。

長期通院する、入院することになった時、またはその後、病院自体について知りたいと考えることも出てくるだろう。病院では日々どのようなことが行われているのか、組織全体の構図、職員それぞれの役割、費用の算出等、病院そのものについて書いた本を参照するのも手だ。特に『イラスト図解 病院のしくみ』（日本実業出版社・木村憲洋、川越満著・一四七〇円）『図解 病院のしくみが面白いほどわかる本』（中経出版・梶葉子著・一五七五円）は内容が充実しており、分かりやすい。基本部分は同内容だが、『イラスト図解』は医療ビジネスについて

多く解説があり、『面白いほどわかる本』は診療所など地域との連携について詳しく書かれている等の特色がある。自分が関わっていく病院について知識を持ってから通うと、受け身だけではない関わりが持てるようになるのではないだろうか。

## 闘病記

がんに対して正面から闘いを挑み続けたのが、ノンフィクション作家・柳原和子である。数多くの医師に疑問をぶつけながら日本中の病院を訪ね、代替療法を試み、とことんまで完治への道を模索した。その過程の記録、また長期生存・完治を果たしたがん患者の話の聞き、纏めた本が『がん患者学』全三巻（中公文庫・一巻・二巻・三巻）（一〇〇円、三巻一・一〇〇円）だ。がんに関心を持ち込んだルポルタージュとして、長く読まれている。



『がん患者学 I』

その後、一度はがんを克服したかに見えた著者が、再発以後書いた本が『百万回の永訣―がん再発日記』（中公文庫・九〇〇円）である。家族・友人・医師たちとの関係、不信、自らの人生を振り返った後の悔、自責、様々な感情が刻一刻と進行する病状と共に綴られる。ルポというよりも、自身の闘病記である。医療に不信を抱き続けた著者が、最終的に一人の信頼できる医師に出会い行き着いた先の言葉が「わたしが賭けたのは医療ではなく、医師としての先生です」だったというのは、一つの救われた形だったのかもしれない。一人の患者の闘いの記録として、考えさせられる。

国民の三人に一人ががんを患っていると言われる時代、闘病記も他の病気に比べ数多く発行されている。がんで亡くなった、または闘病している作家を調べてみるとその多さに驚く。

昨年発行された『手術は、しません―父と娘の「ガン闘病」450日』（新潮社・団鬼六、黒岩由起子著・一二六〇円）は官能小説家として有名な団鬼六氏自身が残した「残日録」と、娘である黒岩さん

が書いた闘病中の記録をまとめている。多くの人に支えられながら最後までユーモアを忘れず、自分らしい生と死を模索した人間味に溢れた一冊だ。  
自費出版を含め、一般の方の著書も限らない。

『おかあさんががんになっちゃった』（メディアファクトリー・藤原すず著・九九八円）は、可愛らしい絵柄のコミックエッセイ。母親のがん闘病、自らの介護の日々を暗くなることなく淡々と、ユーモラスに描いている。闘病中の家族間の微妙な関係性が、コミックになることで誰かの視点に偏ることなく、客観的な視点から描かれたことで、共感しやすいい一冊となっている。



『おかあさんががんになっちゃった』

挙げてゆくときりがながないが、なぜこんなにも闘病記が書かれるのか。そし

て、読まれるのか。書く者の心理としては、自分自身を振り返りたい、記録として残したい、という気持ちがあるだろう。そして、読む者としては、がんのような治療法が定まらない病の場合、良い情報を探すための参考文献でもあるだろうし、また自分と同じように頑張っている人がいるという共感、支えともなるのだろう。当事者ではなくとも、病気を通して人生を見返す、生と死に向き合った人々の記録として闘病記を読んでいくことは非常に実なる読書体験であると思う。お薦めしたい。

何から読むべきか迷ったら『病気にあった時に読むがん闘病記読書案内』（三省堂・闘病記専門古書店パラメディアカ、闘病記サイトライフパレット編・一六八〇円）が参考になる。臓器別に分類された多くの闘病記、さらにインターネットで読める闘病記も豊富に紹介されている。

### その日のまえに

ここまでがんという病について想いを巡らせた結果、果たして何が得られ

るだろうか。がん研究の先はまだ見えず、分らないことだらけだ。何をしても、無駄かもしれないという絶望が常に寄り添っているような気がする。各々の立場から、私たちはどうしていけばよいのか。どう行動していくべきなのだろうか。

個人として思うのは、死を退け逃げまどうよりも、受け止め、今この瞬間にあるものを本当に大切にして過ごすことではないかという当たり前のことだ。



『その日のまえに』

『その日のまえに』（文春文庫・重松清著・六一〇円）は、映画化もされたベストセラーの短編小説集。どれも病気によって死が迫る者と周囲の人々の関わりを淡々と書いている。表題作は妻と主人公がいつか来る「その日」まで、日常を生きながら昔を振り返り噛みしめなが

ら、過ごす日を書く。今までの人生を肯定すること、またたくる明日を生きてゆくために一日を大切にすること、去りゆく者と残される者、互いのためにできるだけ近くで支え合うことの大切さを感じさせてくれる。

がんではないが、認知症を患う祖父と少女の関係を書いた『おじいちゃんが、わすれても……』（ポプラ社・大塚篤子著・一三六五円）も、病気の家族と過ごす大変さだけでなく、共に過ごす日々を大事に過ごし、またこれまでも振り返ることの意味を感じさせてくれる。



『おじいちゃんが、わすれても……』

本書の中で、中学生である孫の杏（もと）が、自分のせいでいなくなってしまう祖父を探し歩くシーンがある。その時、かつて祖父が大雨の中、迎えに来てお

ぶってくれたことを思い出し、今度は自分が祖父を助けに行きたいと思う。結果祖父は見つかるが、体は弱り、だんだん杏のこともわからなくなってしまう。それでも、それが今のおじいちゃんなんだ、と家族と杏は受け入れ、共に日々を過ごす。この本を読んでつい自分を重ねてしまった。やはり、祖父に忘れられることが多くなったからだ。それでも、全くかわらない。生きていて、共に過ごしている今があることが、何よりも大事に思えるからだ。

現実 は物語のように綺麗にはいかない。患者は苦しく、家族はかみ合わないこともある、つらいことが沢山ある。それでも、今と向き合うために、個人と向き合うために、目をそらさず、大きくアンテナを張り続ける。そして「その日」に備える。自分で見つめて生きる。単純な結論になつてしまったが、実はとても大切で難しい生き方を、がんや病は教えてくれるのだ。

（渡）

今月の  
おすすめ

社会科学

これは誰の危機か、  
未来は誰のものか

スーザン・ジョージ著

政治経済学者で反グローバルバリズムの活動家による最新の論考の翻訳である。

新自由主義グローバル化体制により私たちは牢獄に閉じ込められ、貧困、紛争、気候変動などの危機に瀕し、自由を奪われていることを説明しようという。

そして、この体制を支配している国際的な富裕層であり、エリート層である「ダボス階級」に対して、平等で包容力のある社会を自覚的な闘いで社会的復元力をつけて求めていくことでこれらの危機を共有させ、協力させていくことを主張している。

岩波書店

二五二〇円

デフレ下の金融・財政・為替政策

湯本雅士著

バブル崩壊以後、日本経済は長くデフ

レの問題に悩まされ続けているが、本書にはその解決策への糸口が提示されている。著者は日銀出身。米国（FRB）と日本（日本銀行）に主に注目し、中央銀行のこれまでの政策と今後の役割について、詳細なデータをもとに論じている。金融分野の最先端の理論がもはや一般市民には難解すぎる現在、その溝を何とかしなければという思いが執筆の動機と語る。

岩波書店

三一五〇円

金持ちはますます金持ちに  
貧乏人は刑務所へ

ジェフリー・ライマン、ポール・レイトン共著

アメリカの刑事司法制度は、貧困という障害を緩和し、高い犯罪発生率を劇的に減らす政策を実行していない。しかし、本書はアメリカの刑事司法制度が犯罪抑制をそもそも「望んでいない」と表現し、その失敗によって金持ちと社会的権力者が利益を得ていると述べている。アメリカで三十年間のうちに第九版に達するという超ロングセラーの邦訳である。

花伝社

二六二五円

人権を創造する

リン・ハント著

本書はいわゆる人権思想が十八世紀ヨーロッパにいかにかに生まれ、発展していったのかを明らかにしている。家族や宗教的結びつきを超えたより大きな普遍的な価値を持った自律した個人による共同体がいかにかに生まれたのか。

小説、哲学、法律書などの膨大なテキスト読解を通じて浮かび上がってくるのは、「想像された共同体」ならぬ「想像された共感」と呼びうる人々の心と身体における大きな変化であり、それが人権思想に大きく寄与したと著者は見ている。

岩波書店

三五七〇円

フリスビー犬、  
被災地をゆく

石川 梵著

著者は写真家。本書は愛犬とともにボランティアとして、震災後の東北地方太平洋沿岸を六十日間旅してまわったフォトポルターージュ。主役は人が投げたフリスビーをジャンプしてキャッチするボーダーコリーの十兵衛。疲弊した

被災者の気持ちを自然と和ませる十兵衛は、セラピー犬としても存在価値を發揮した。

飛鳥新社

一四七〇円

### 不動産は

### 「物語力」で再生する

川井徳子著

不良債権化したホテルや商業施設を次々と再生させてきた著者の、その手腕に迫った一冊。第三章では父の死をきっかけにはじまった壮絶な過去（家族との断絶や闘病生活）が語られ、なぜ再生という事業にこだわるのか、そのルーツが明らかにされる。奈良や京都といった、ローカルな文化と外国人観光客を迎え入れるというグローバルな視点が融合したグローバルビジネスの成功こそが、これからの地方経済の発展には不可欠と訴えている。

東洋経済新報社

一五七五円

### サムスン式仕事の流儀

ムン・ヒョンジン著

韓国の電機メーカー、サムスンで管理職として働いた経験のある著者が、サ

ムスン社員の凄さについて論じた内容。特徴は圧倒的なスピード感、まさに電撃戦の連続だ。例えば海外出張した際、帰りの機内で報告書を作成するのは当たり前、とか。サムスンで五年働けば一流社員になれるそうだが、その五年間に覚える仕事のやり方の数々がとても具体的に解説されていて、本書を読むだけで同等の知識が身につく仕組みになっている。

サンマーク出版

一五七五円

### 魅きよせるブランドをつくる

### 7つの条件

### 一瞬で魅了する方法

サリー・ホッグスヘッド著

人も物も企業も、人を惹きつけるためにはどうすればいいのか？ どうすれば人は感動し、それらの物を手に入りたい、関わりたいと思うのだろうか。「何が人を魅了するのか。なぜ魅了されるのか。」この魅力的な問いに、ブランドコンサルタントである著者が答える。著者が用意するのは、欲望・神秘性・警告・威信・権力・悪徳・信頼という七つのトリガー。これらが、魅力を構成して

いるという。あとはいかに、七つのトリガーを効果的に用いるか。数多くの具体的事例で魅力の仕組みをひもひもた後には、実践編が待っている。「魅力学」の書。

パイインターナショナル

一九九五円

### イノベーションのDNA

クレイトン・クリステンセン、

ジェフリー・ダイアー、ハル・グレガーセン著

名著『イノベーションのジレンマ』（翔泳社・二一〇〇円）のクリステンセン教授による最新刊は、破壊的なビジネスアイデアを生み出す能力に焦点を当てている。一般に創造的に考える力は生まれつきと思われている。ジョブスのような人は普通の人とは違うと。しかし教授は、創造性は神秘でも魔法でもなく、方法さえわかれば誰にでも習得できると主張する。本書は五〇〇〇名超のイノベーターや企業幹部への多面的な調査を通じて、革新的なアイデアを生み出す能力を高めるスキルを解き明かす。イノベーション論と発想法の新たな傑作である。

翔泳社

二一〇〇円

**今月の  
おすすめ**

**コンピューター**

**ヴィクトリア朝時代の  
インターネット**

トム・スタンデー著

長らく翻訳が待たれた一冊。「十九世紀にインターネットがあったノ」という帯が目をはひく。「思想のハイウエー」と呼ばれた電信のことだ。電信が広まることで利用者に与えた影響はまさにインターネットと同じように大きなものだった。当時の電信の歴史を振り返ることは、インターネットと共にある我々の姿を見ているようでもあり、面白い。

NTT出版

二五二〇円



**グーグル**

**ネット覇者の真実**

ステイブン・レヴィ著

『ハッカーズ』（工学社）『暗号化』（紀伊國屋書店）『Podは何を変えたのか』（ソフトバンククリエティブ）など多数著書を持つ、アメリカ屈指のテクノロジジャーナリスト、ステイブン・レヴィの最新刊。Google社内への取材を行い、検索エンジンに始まり「ネット覇者」として名を馳せ、SNSではFacebookを追う立場となった現在までを追ったドキュメント。

阪急コミュニケーションズ

一九九五円

**言語実装パターン**

Terence Parr 著

著者はコンパイラの構成解析部を生成するANTLRの作者。著者曰く「もし言語の作り方を今すぐ習得しないといけないのなら、本書はまさにうってつけ」とのことだ。前書きにはRuby作者まつもとゆきひろ氏、監訳には中田育男氏と太鼓判が押されている。

オライリー・ジャパン 三七八〇円

**OpenCV2**

**プログラミングブック**

OpenCV2プログラミングブック制作チーム著

ロボットの目が作れる技術として知られるOpenCV。最近では内視鏡にプログラムとして組みまられることがあるなど、応用事例がじよじよに増えてきた。本書では二〇〇九年九月にリリースされたOpenCV2の導入から、リファレンス、活用事例までを解説する。

マイナビ

三五七〇円

**100万人から教わった  
ウェブサービスの極意**

藤川真一著

携帯電話から「Twitter」を利用するためのサービス「モバツイ」の開発者「えふしん」こと藤川真一氏が語るウェブサービスクリエイターとしての考え方。藤川氏はサーバ負荷の対応策として、いち早くクラウドサービスAmazonEC2を利用し、話題となったが、そういったサービス開発、運営の裏側まで知ることができる貴重な一冊だ。

技術評論社

一六五九円



## 自然科学

### 雪の結晶図鑑

菊地勝弘・梶川正弘著

雪の結晶は肉眼でも充分きれいに確認できる。が、この本に記載されているような、ものすごく細かいところまでは見ることができない。また、すぐ溶けて形が崩れてしまうので、長時間観察することとは難しい。一様に六角形だと思っていた結晶も実は様々な形があり、宝石のように綺麗で幻想的だ。

ただ崩れて欠片になってしまった結晶だと思っていたものも、実はそういう種類の結晶だったり、新しい発見もある。

この冬は厳冬のため今後各地で雪が降ることがあると思われるが、その時はぜひ結晶を肉眼で確認してみたい！

北海道新聞社

二二二〇円

### サイエンス入門 1

リチャード・ムラー著

本書は文科系学生を対象に行っているカリフォルニア大学の有名な講義をベースに書かれたものの第二弾。

第一弾は同著者の『今この世界を生きているあなたのためのサイエンスI・II』（楽工社・各一五〇〇円）で、こちらのヒツトも記憶に新しい。

サイエンス入門とはいうものの、原題「Physics and Technology for Future Presidents」の通り、物理の基本を学びたい方にぴったりの内容。

第一講エネルギーの話から読み進めると、いきなり数字がたくさん出てきて諦めたくなるのだが、そこを我慢して読み進めていくと重力と力と宇宙の講で少し面白くなり、原子核と放射能の講では途中でやめられなくなる。

原発のニュースが流れない日はない、今だからということが大きいのだが、簡単なところから勉強する気になつてくるし、ここらでもう一度基礎を覚えておいた方がよいのではないだろうか。

楽工社

一九九五円

### 鎌倉の西洋館

柴田 泉著

萩原美実写真

古都には洋館がよく似合う。社寺について様々な歴史が語られる鎌倉でも然り。横浜居留地の外国人による別荘地としての位置づけは、その後多くの文人や政治家らに引き継がれる。

洋館にとつての試練は地震と戦災である。鎌倉も大正十二年の関東大震災に見舞われ、現存する建物の多くはその後に建てられたものである。湘南の明るい日差しを取り入れるため大きな窓やステンドグラスが大きな特徴といえる。すぐ裏に山が迫り、南を見れば海が見渡せる独特の風景は、建築家の個性よりも住む人の生活に根ざしたモダンズムをそこに見出すこととなる。

鎌倉文学館、旧華頂宮邸、旧辻清次郎別荘がいわゆる鎌倉三大洋館とのこと。

特に侯爵加賀前田家の別荘として建てられた鎌倉文学館は青色の瓦、渋い玄関、手入れの行き届いた庭など、展示物に比肩する必見の価値を有する。

平凡社コロナ・ブックス

一六八〇円

今月の  
おすすめ

医学書

創薬科学入門

佐藤健太郎著

創薬は、新しい医薬品を生み出すプロセスのこと。化学合成や天然物を基にして化学物質が「薬のタネ」として作られ創薬が行われていく。長期間を要し様々な過程を経ても新薬誕生の確率は二十万分の一と低い。一人の研究者が担当する領域は細分化されているが、著者は自分の守備範囲にこだわらず広い視野を持つことが必要だという。創薬のしくみをわかりやすく解説し、基礎知識を身につけるのに役立つ一冊。

オーム社

二二〇〇円

災害ストレスの対処法

山口昌樹他著

東日本大震災から十ヶ月が過ぎた。突然家族や友人を亡くし、命の危険を体験した被災者。将来への不安、放射能の恐怖などからくる心理的身体的ストレスが

様々な症状に現われる。本書は、ストレスを感じるメカニズムを科学的に理解し、災害ストレスの事象ごとの対処技術の知識を身につけることを目的としている。本来ストレスは、打ち勝つ敵ではなく共存していくべきものであり、ストレスに対する自分自身の特性を知りうまく付き合うことが大切である。ストレスに苦しむ被災者を救う一冊。

講談社

二二〇〇円

いつもの治療を見直す！

なぜ診療。パーフェクト

川畑雅照編

風邪の季節。まさに今ノという時期に、特集に定評のあるレジデントノートから「なぜ」特集が出た。経験を重ねた医師はどこぞの診療には慎重になるそうだが、一体その怖さ、難しさとは何なのか。

「なぜ」というウイルスが存在するのではなく、病原微生物が多すぎると原因療法がなく、ひたすら自然治癒を待つだけのかぜ。辛い人には酷く辛い「なぜ」。夏に多い子どもに流行する手足口病も、目下流行中のインフルエンザも「なぜ」の一種。原因が特定出来るならともかく、

一般的な「なぜ症候群」は医師が処方出来る総合感冒薬には限りがあるようだ。

「なぜ」を甘く見ず、重大疾患を見逃さないためにもこの一冊、なぜシーズン必携である。各専門医からみたなぜ診療の項目もあるので、「専門じゃないしなあ……」と思わず、診断の参考にせひ。

羊土社

四四一〇円

続・日々コウジ中

柴本 礼著

くも膜下出血で倒れ、高次脳機能障害を患った夫をもつ妻が日常を描くコミック第二弾。夫が倒れ障害を負いながらも家族や周囲の献身的な支えにより就労し、社会復帰を果たした前作に続き、今作では書籍出版後の生活、様々な活動の中で出会った当事者、家族の方々の千人千様の様子、行政への提言、そしてふふつと笑わせてくれる家族の日常が綴られる。広く読んでもらいたい、もし真つ暗なトンネルの中で孤独に悩んでいる当事者、家族の方がおられたら、是非一読してもらいたい。数ある類書の中で、一番わかりやすく、一番前向きに、元気にしてくれるだろう。

主婦の友社

一一五五円



## 人文科学

### 英和対訳 神道入門

山口 智著 書店で働く私どもでも海外からのお客さまには拙い英語で苦労することがあるが、神社などにはさぞかし沢山の外国人観光客がいらつしやることだろう。そうした神職の方や、神道を勉強する外国人の方にもとてもわかりやすい本が出た。大使館員など豊富な海外勤務経験を持つ現職神主が神道を英和対訳で解説しているので、この概念は英語でどう説明するのかなどすぐわかる。内容は折紙付きであるの言うまでもない。

戎光祥出版

一八九〇円

### 南方熊楠大事典

松居竜五・田村義也編

幼い頃、その驚異的な記憶力ゆえに神童と呼ばれた南方熊楠。植物学を基礎としながらあらゆる文献を渉猟し、人類学・考古学・宗教学なども吸収することで独自の知的体系を構築した南方熊楠は、最

終的に粘菌から宇宙の真理を見出そうとした。本書は南方熊楠という大きな物語を「思想と生活」「生涯」「人名録」著作「資料」「年譜」の六つに分け総合的に論じた事典である。生々しいクマクス像が堪能できる一冊。

勉誠出版

一〇二九〇円

### 世界はなぜマルクス化するのか

馬淵浩二著

不況が叫ばれる昨今、世界中において労働環境が芳しくない。働きたくても働けない。働いたとしても労働力を安値で売らなければならない労働者たち。本書は、個人の生命が社会的に生産され、労働者へと訓育されていく過程を「マルクス化」と捉えて読み直した野心的論考である。

マルクスはつぶやく。《ある問いに私たちを与えることは、その問いを解くことである》と。働くという根本を今それぞれが問い直す時期なのだ。

ナカニシヤ出版

二五二〇円

### カエルの声はなぜ青いのか？

ジェイミー・ウォード著

掃除機は黒い音がする。「自由」はヨー

グルトの味がする。そんな特別な感覚で世界を見ている人々がいる。本書はそんなような共感覚の世界的研究者であるジェイミー・ウォードが、一般向けに共感覚とはなんなのか、分かりやすく書いたもの。スピリチュアルな側面から語られることの多い「オーラ」も実は共感覚が見せるものだった？ 共感覚者にもそうでない人にも新たな世界が開ける一冊。

青土社

二三一〇円

### 「うつ」の構造

神庭重信・内海 健編

「新型うつ病」がいろんなメディアで取り上げられ、まるで風邪のごとく流行病の様相を呈している昨今だが、そのあり方も複雑に変化している。従来のやり方では「うつ」をとらえにくくなっているのは事実のようだ。「うつ」に関する書籍は多々あるが、本書では精神病理学・精神分析・医療人類学・精神薬理学・神経生物学などの専門家がワークシヨップで相互に討議を重ね、その成果を踏まえて執筆されており、まさに「うつ」の構造を知るには最適の最新論文集である。

弘文堂

三三六〇円

# 今月の おすすめ

## 文学・文芸

### 福永武彦戦後日記

福永武彦著

美しい姉妹に愛されながらも自死を選ぶ主人公を描いた中編『廢市』や、求めでも得られない愛の孤独を描いた『草の花』など、いずれも「愛と孤独と死」を作品の主題とした作家の「戦後日記」。

この作品は、敗戦後、疎開先の帯広に妻子を残して文学で身を立てるべく東京へと向かった若き日の作家の内面が克明につづられている。

再発した結核のために繰り返す闘病生活や、詩人である妻との不和といった困難な状況下でも、翻訳をこなしながら同人誌を作り、小説のプロットを考えるなど、自分の信じた道を疑わずに邁進する表現者としての強さとにかく圧倒された。この作品を読むと、孤高の表現者だったが為、自身の孤独を作品の中に昇華できたのだと思えてくる。

新潮社

二四一五円

### すれちがうとき聴いた歌

柗野浩一著

短歌をもとにした七つの掌編小説。短いお話がそれぞれ繋がっていて、ぐるりと輪になり、木の根のように入り組んでいる。この七つの歌が、どれも良い。

がつんとした強さはないけれど、あとからふわっと漂ってきて、いつまでも心に残る。どこにでもありそうだけど、触れるにはなかなか遠い世界のお話。

著者の柗野浩一氏が、新宿二丁目で出会った人々のことや自身の体験を元にしたというが、會本久美子氏の幻想的なイラストもあいまって、現実的でありながらもお伽噺のような趣きである。

リトル・モア

一四七〇円

### アッテイラ！

初山市太郎著

三作品からなる小説集。なかでもおすすめは表題作「アッテイラ！」である。

世界中を放浪する国なき民族「アッテイラカイラー」。夢のお告げで日本にやってきた彼らとの交流の日々を描いた作品は全編に音楽があふれている。アッテイラカイラーの音楽と先人からの教えがシン

ブルだがとても素敵なのだ。「恋は素敵」「酒はうまい」、「子供はかわいい」などなど彼らの音楽がまるまる紹介されているが、すべてのフレーズが胸に響く。

光文社

一三六五円

### 思い出しておくれ、 幸せだった日々を

評伝ジャック・プレヴェール  
柏倉康夫著

シャンソン「枯葉」の作詞や、映画「天井桟敷の人々」の脚本で有名な詩人ジャック・プレヴェールを浮き彫りにした熱のこもった本格評伝。四部三十五章からなる評伝は、幼いころの生い立ちに始まり、シユレアルリズムとの出会いを経て映画や詩作へと活動を広げ、晩年へと至る詩人の魅力を、豊富な資料を読み解くことで余す所なく伝えている。

まるで記憶の断片をつなぎ合わせるかのような記述は感情移入し易く、その手法そのものがリリカル。詩集が入手困難な現在、詩の豊富な全篇引用は貴重で、作品集としても一読に値する。値段とそのページにひるむことなかれ。圧巻である。

左右社

七五六〇円

今月の  
おすすめ

文庫・新書

先生と僕

坂木 司著

「一度さ、警察官に『探偵ごっこはやめろ』とか言われてみたかったんだよね」  
怖がりなのに大学の推理小説研究会に入るこゝとなつた伊藤二葉は、ひょんなことから中学生の瀬川隼人と知り合う。ミステリ好きの隼人から面白い推理小説を教えてもらう代わりに、隼人の家庭教師を引き受けることになつた二葉だったが、行く先々で不思議な出来事と遭遇し……。

いわゆる日常ミステリ。中学生の瀬川隼人を探偵役に、本屋の雑誌に挟まっていた謎の付箋、火事のカラオケボックスから消えた二人の少女など、二人が日常で出会つた不思議な出来事を解決していく。ちなみに巻末に収録された「特別便」、坂木司ファンはぜひ読むべき。ちよつとニヤリとしてしまう。

冒頭の台詞は「第五話 見えない盗

品」の瀬川隼人の言葉より。おもわず共感を覚えた方は、すでに手遅れである。ミステリ中毒的な意味で。

双葉文庫

六〇〇円

おやすみなさい、ホームズさん上・下

キャロル・ネルソン・ダグラス著

本書は、シャーロック・ホームズ『ボヘミアの醜聞』へ至る物語、あるいは『ボヘミアの醜聞』アイリリー・アドラーサイドと言えらるる。

女優の傍ら、探偵業を営むアイリリー・アドラーの姿がいわゆるワトスン役のベネロビー・ハクスリーの語りで描かれている。美しく強かで行動力も決断力もあり、出世欲も強いアイリリー。そんな彼女とベネロビーとの女の友情や、後に彼女の夫となるゴドフリー・ノートンとの関係、折に触れてホームズを意識している様子など、読み応え十分、ちらほらと実在した有名人も出てきて楽しみも満載。

この作品の後にもう一度『ボヘミアの醜聞』を読んでみると、これまでとはまた違った目で話を追うことだろう。

創元推理文庫

各九八七円

猫を抱いて象と泳ぐ

小川洋子著

存在しない人物の伝記。それがここのまで見事に描けるものなのか。本当に「才能」というものを感じさせる読みやすさ。小さな陶器の小物のような言葉たちが、一人の天才チェスプレイヤーに育つていく少年の人生を見事に眼の前に映し出す。

独特の「不幸感」が小川さんの小説にはいつもひっそりと存在している。不幸を受け止めて前に進める人間ばかりじゃない。そんな忘れられないような、泣きたくて、苦しくて、むしろ愛おしいような記憶。それらに胸が締め付けられる。そして夢中で彼についてのその記憶を共有する。

静かな夜に泣きたいような歯がゆいような気持ちになりながら、優しい気持ちで涙が頬を伝う、そんな名作である。わざとらしくない、フイクシヨンの感動を求める方におすすめな作品。

文春文庫

六二〇円

今月の  
おすすめ

芸術

クリムトの世界

新人物往来社編

金箔の施された、きらびやかな女性を描いた官能の画家・クリムト。生誕一五〇周年に先駆けて発売された入門的作品集である。掲載作品の多さでは、手に入る画集の中ではピカイチではないだろうか。「接吻」などの代表作から、風景画、素描、肖像画など、広くクリムトの世界に触れられる逸品。

新人物往来社

二三一〇円

大笑点 完全版

立川談志著

二〇一一年十一月に亡くなった落語家の立川談志さん。本書は雑誌「特冊新鮮組」で連載していた読書投稿大喜利「大笑点」をまとめたものだが、過去に出た二冊の単行本を一冊にまとめ、さらに当時未収録だったネタも含めた、まさに完全版と呼ぶに相応しい本になっている。

内容は、連載していたのがアタルト雑誌だったこともあり、どぎつい下ネタが若干多め（というか、ほとんど？）なのだが、それだけに爆笑できるものばかり。談志も「高座のネタにも使ってるぐらいのレベル」と、読者のセンスを賞賛している。また、春風亭昇太や立川志らくらの落語家、爆笑問題、アンジャッシュらの芸人、果てはみのもんたやさだまさしといった大物も、読者と同じお題にチャレンジ。彼らプロとアマチュアの、果たしてどちらが面白いのかにも注目である。

読者の視点を借りながらも、談志の毒が思う存分楽しめる本作。連載当時（十年前）の時事ネタも多いが、当手を懐かしむ意味でもおすすめの一冊だ。

竹書房

一六八〇円

はじめての編集

菅付雅信著

書籍、テレビ、広告、インターネットなど、日ごろ私たちが目にするほとんどのは「編集」という作業を経て成り立っている。「編集」とは一体何なのか。著者は、編集とは「企画を立て、人を集め、モノをつくること」と定義している。

編集する媒体が多様化し、その手法が変化してきても、「それを通して何かを伝えたい、表現したい」という思いは、初めて編集行為が行われた古代メソポタミア文明の時代から何一つ変わっていないのではないだろうか。

本書は編集を志す人に向けて編集の歴史や手法を分かりやすく解き明かそうと試みたものであるが、純粹に読み物としても楽しめる一冊に仕上がっている。

アルテスパブリッシング 一八九〇円

江戸の縁起物 浅草仲見世助六物語

木村吉隆著 藤井恵子聞き書き

無病息災、家内安全、商売繁盛などなど、様々な願いが込められている縁起物。本書は、江戸末期より浅草に店を構える、江戸趣味小玩具店「助六」の店頭に並ぶ小玩具のごく一部を紹介したものである。今のおもちゃのように派手に動いたりするようなものではないが、職人が一つ一つ心を込めて作っているものだからこそ、味わい深く愛嬌のある仕上がりになっている。是非、後世に大切に残されるものであって欲しい。

亜紀書房

二四一五円

今月の  
おすすめ

実用書  
地図・旅行書

お坊さんが教える

一こころが整う掃除の本

松本圭介著

シンプル生活を勧める書籍が多く発売されるなか、お坊さんが教えるお掃除の本が登場した。

修行生活中のお坊さんは、驚くほど物を持たない。必要最低限の道具以外は一切の持ち込みを禁止されている。与えられる空間は畳一枚分で、彼らはその空間で坐禅も食事も睡眠も行うという。

また、お坊さんの一日は掃除で始まる。

掃除は心のくもりを取りはらう為に行われるのだから、いつ行っても良いというものではない。朝の空気に身を置くことで気持ちもいっそう引き締まるのだ。

生活をシンプルにすることで、自分を見つめる時間を作り丁寧な暮らしを心がける。忙しい今を生きる全ての人に試してもらいたい。

デイスカヴァー121

一三六五円

美しい気配

前田義子著

はつきりとは見えないが、漠然と感じられる様子。それが気配。街にも道具にもアートにも美しい気配を感じることが出来る。それはそこに携わった人たちの心の美しさがあるから。生活の多くをニューヨークで送っている著者だからこそ惹かれた、四十四の日本の美しい気配には気づかされる事が多いはずだ。知性・品位・清潔感をテーマにしている彼女の文章は読者の心を優しくつかむだろう。改めて日本を大切にしていかねばと思う一冊である。

産経新聞出版

三〇〇〇円

KAMINOGE vol.1

KAMINOGE 編集部

晋遊舎の『Dropkick』に続く、『紙のプロレス』の遺志を継ぐ雑誌が始動した。

この時点でプロレスファンならば必読である。「世の中とプロレスするひろば」というキャッチの通り、甲本ヒロトの巻頭インタビューや快樂亭ブラックが語る「談志」など、プロレスの話題のみならず、3・11も含めた今の日本の中でプロレス

(「見せ物としての闘い」する人々の、笑えて泣けるはなしばかり。

東邦出版

一〇〇〇円

山岳マンガ・小説・映画の系譜

「山」はいかに描かれてきたのか

GAMO著

本書のベースとなっている著者のホームページ「ヴァーチャルクライマー」の開設は二〇〇〇年。登山に出会い魅せられた著者が、当時まだネット上では困難だった山岳小説の情報収集を目的に、自らサイトを立ち上げたのがきっかけだと言う。

その圧倒的な情報量にまず驚かされる本書だが、元々著者は小説やマンガ・映画好きだったと言っただけあって、『山岳』を抜きに考えても、それぞれがマニアックかつディープな内容となっていて全編とても興味深い。

登山経験の有無に関わらず、『山モノ』は人を惹きつける魅力に溢れている。巻末の年表を片手に「ヴァーチャルクライマー」体験を是非オススメしたい。

山と溪谷社

一五七五円

# 今月の おすすめ

## 語学・辞典

### 基礎からわかる会社で使う英語

New Edition

日向清人著

よく使う決まり文句が様々なビジネスシーンごとにまとめられている。会話編では挨拶に始まり、電話・会議・交渉・プレゼンを場面別に収め、文章編もレター・FAX・Eメールの基本的な書式から、問い合わせ・見積書の依頼や提示・発注や受注連絡など、およそビジネスの現場においてはどんな職種であれ必要とされるシーンを想定した内容で構成されている。昨今、需要の高いノンネイティブの音声聞くことができるのも特徴で、付属CDにはネイティブの英語しか収録されていないが、HPから中国人・インド人の英語の音声をダウンロードできる。

類書に比べ文字数は多いが、その分利便性は高く初心者におすすめ。

ピアソン桐原

一九九五円

### ステイプ・ジョブズに学ぶ 英語プレゼン

上野陽子著

本書ではジョブズのプレゼンを解剖し、心に残る彼の英語表現を紹介している。

英語のプレゼンというと、間違えてはいけないと緊張するあまり、本来の目的である「内容を伝えること」が二の次になり流れがよどんでしまいがち。ジョブズのプレゼンも完璧ではなく、文法や表現について指摘を受けそうな箇所がいくつもあるとのこと。にもかかわらず、著者はジョブズのプレゼンは大変わかりやすく、構造が明快だと改めて実感したと述べている。そして彼のプレゼンはまるでショーのような楽しさがある。ぜひ本書を利用してあなたも英語プレゼンにチャレンジしてください。

日経BP社

一六八〇円

### 語源の楽しみ

石井米雄著

英単語を、例えば電話帳を読むように「abacus, abandon, abase」と覚えていても絶対覚えられない。「[manus]という単語がラテン語の「手」

だと覚え、「Manual（手引き、入門書）」[manuscript（手で書かれたもの）手写本]だとながりをつけていけば効率よく単語を覚えていける。本書ではラテン語を語源として派生した英単語を数多くとりあげ、エッセイ調に紹介していく。単語数を絞り、より英語に親しむための読物となっていて、お勧めの一冊。

めこん

一五七五円

### 例文で覚える

#### 中国語類義語1000

北京大學出版社編 平山邦彦日本語版監修

他社から類義語の本は数冊出ているが例文と単語数が他を圧して中上級者向けの本書をここで紹介したい。

どの言語もそうなのだが、中国語のレベルアップにおいても類義語の習得はキーポイントの一つ。本書では一〇五四語という大量の類義語を例文暗記で覚えていく。さらに例文の日本語は直訳ではなく、できるだけナチュラルな日本語に近い形の中国語に訳されている。「こういう表現を中国語にするとどうなるか」という時に一つのヒントとなるだろう。

アスク出版

二六二五円

今月の  
おすすめ

児童書

トントントン、をまちなしよ

あまんぎみこ作 鎌田暢子絵

雪の日、寒い夜にそなえてお母さんはあまざけをたくさん作ります。そんなにあまざけをたくさん作ってだれにふるまうのか、みこちゃん不思議でなりません。やがて夜になりトントントンと玄関の戸をたたく音がしてきました。なつかしさを感じさせる絵柄とテンポのよい言葉が、読んでいてとても心地良い絵本です。寒空の下、家の明かりや湯気の立つあまざけに嬉しくなっています。

ひさかたチャイルド 一三六五円

みにくいフジツボのフジコ

山西ゲンイチ著

ある日フジツボのフジコは、本当は実の子ではないことをママから告げられ、ほんとうのママをさがしにのらねこトムと共に旅に出ます。予想外な展開にぐいぐい引きこまれ、ついに笑いがこみ上げ

てきてしまいます。山西ワールド全開の実に愉快で楽しい一冊です。

アリス館 一三六五円

シールの星

岡田 淳作 ユン・ジョンジュ絵

テストで満点をとるともらえる、銀色の星のシール。しかしある日、先生があたりらしいルールを発表しました。おなじ班に零点の子がいたらシールはもらえず、班の人はお互いに助け合って勉強をしないといけないのです。シールがほしいマアコと一平は、とつてもニコニコして気がいいのに勉強をしないしんちゃんに手を貸そうと動きだします。しかしおはなしは意外な方向へ進みます。そして二人はしんちゃんからとても大切なことを教わるのでした。

偕成社 一〇五〇円

鉄道きょうだい

E. ネズビット著 中村妙子訳

ある日突然、お父さんは留守になり、田舎での貧しい暮らしになる三姉弟。鉄道を通して土地の人々と交流する姉弟。そして、人とのつながりが幸運をもたら

します。

教文館 一六八〇円

クロックワークスリー

マシュー・カービー作

石崎洋司訳 平澤朋子絵

バイオリン演奏者のジュゼッペ、メイドのハンナ、時計の事に詳しいフレデリック。三人の子どもたちは事件にふりまわされながらも、まわりの大人たちに助けられながら、立ち向かっていきます。五〇〇頁程の厚い本ですが、それを感じさせない面白さで読んでしまいます。

偕成社 一三三〇円

ヒラメキ公認ガイドブック

ようこそ宇宙へ

キャロル・ストット著 伊藤伸子訳

リサ・スワーリング、ラルフ・レイザー絵

ビッグバンから未来の宇宙、そして、宇宙を研究してきた人々について、ヒラメキくんとともに学んでゆきます。子どもも大人も一緒に楽しむことができます。用語集と索引も巻末に付いており、調べ学習にもお勧めです。

化学同人 二六二五円



島田さま

この号が出る頃には、夏葉社さんの新しい詩集はもう店に並んでいるでしょうか。ああ早く手にとってばらりばらりめくって頁の声を澄ませたいです。詩のことは実はよくわからないのですけれど、首を長く長く待っています。待ち遠しいなあ。どんな詩集なのでしょう。う。どんな装丁になるのでしょうか。

実は詩だけではなく、私はいろんなことがよくわかります。いままでよく生きてこられたものだと思います。きつと、ひとに恵まれているおかげだと思っております。自慢しなくなるくらいにすてきなひとがまわりにたくさんいてくれます。そ

の大事な大切な大好きなひとたちが、生かしてくれているのだなあ、つくづく思います。

その中のひとりに、武田こうじさんという詩人がいます。武田さんの詩で、ひとつ、とても好きなものがあるのです。「夜の途中は朝の途中」という詩です。「穏やかに受け入れていく夜の途中／お互いがお互いに与えることができますように／穏やかに消えていく朝の途中／奪い合う前に笑い合うことができますように」

朗読を聴くときにはいつも、この詩をたのしみに待っています。なにがどうよいつてうまく言えないのかもしれませんが、ですけれど、気持ちに寄り添ってくれることばに出会えたということは、とてもしあわせなことのような気がします。新しい詩集にも、そんな出会いがあるといいなああって、わくわくどきどきして待っていますね。

このところほんやりと考えていることがあるのです。ひとつひとつの単語自体には意味はあっても、ちからのようなものはなくて、文章や会話や手紙になって、届けたいひとがいて気持ちがあつて物語があつて、それが読むひとと聞くひとの心

に届いたときに、ちからになるのかなあ、つて。それから、実用書じゃなくても、すべての本はきつとつか、役に立つのじゃないかな、つて。教えてもらったこと、見せてもらった世界、たくさんあります。なんて、ややこしいことを書いてしまいました、やっぱりよくわからなくて、素直に単純に、ただただ本が好きで、読みたくて、読むとやっぱり、本はいいなあつて思うのです。うふふ。でもきつと、それでもよいのですよね。

いままでにたくさんのは、たくさんん気持ち、たくさんんちから、たくさんんひとからいただきました。それはどんなごちそうよりどんな薬より、私にはいちばんの栄養でした。本のそばにいなかったら、知り合うことのなかったひとにもたくさん出会えて、たくさんことをかわして、また会いたいひと、また行きたい街がたくさん増えました。大事な大事な宝物です。

このおたよりのやりとりも、たのしくてしあわせな半年間でした。ありがとうございます。なんだかしんみりしてしまっています。何度も何度も読み返したい本、ずつといつしよにいたい本を、これから

も届けてください。それをこの街の本を愛するひとに届けるお手伝いをさせてください。ずっとずっとここで、島田さんのつくる本が、世界が、やってくるのを待っています。

▶▶往・島田▶▶復・佐藤▶▶

純子さんのお手紙を読んで、胸があつくくなりました。なにを書けばいいのかわかりませんでした。よくわからなくなっていました。最後の往復書簡、さみしいかぎりですが、僕は今回もまた、個人的なことから書き始めようと思います。

僕は高知県の室戸で生まれました。とは言っても、母が一時的にお産のために室戸に帰っただけであって、育ったのは東京の世田谷です。何度か家を出たことはありますが、いまも昔と変わらず、小田急線沿線の、小さな町に住んでいます。子どものころから、夏休みになると母と一緒に室戸に行きました。長いときは一カ月近く滞在しました。一歳年上の従兄と、朝から晩まで、港で泳ぎ、カブトムシを獲り、お好み焼きを食べ、ファミコンで遊びました。

「子どもたちよ 子ども時代をしっかり

とたのしんでください おとなになってから 老人になってから あなたを支えてくれるのは 子ども時代のあなたです」

敬愛する石井桃子さんは、子どもたちにそう語りかけました。世田谷文学館でこの言葉に出会ったとき、僕はいろんなことを思い出しました。陽光に照りかえる室戸の山の葉の輝きや（社名の由来でもあります）、大海原、花火、夏の庭で水の入ったホースの両端を互いに啜え、せーので思いっきり息を吹き込んで、びしょぬれになりながら笑った従兄との日々。幼いころの自分の笑い声が、まだお腹の底にあって、それがいまでも、自分の人生を豊かにしてくれているような、そんな気がしました。

「すべての本はきつといつか、役に立つのじゃないかな」と純子さんは書きました。僕もまた、同じ意見を持ちます。

幼いころは天真爛漫に遊び、思春期になつて、よくあるように、孤独になり、本を読み始めました。本が具体的に生活を助けてくれたということは（料理本をのぞけば）なかったかもしれませんが、本を通して、僕もさまざまな人に会うことができました。

そうそう、昨年末、僕がずっと親しくさせてもらっている七つ上の友人が、こんなメールをくれたんですよ。

「たつた今仙台ジュンク堂で『星を撒いた街』を購入したら、店員の佐藤さんという方に、その本、夏葉社の本全部好きなんですと声をかけられ、なんだかうれしくなりました」

こんなことって、あるんですね。話がうまくまとまりませんが、最近、感動したのは辻征夫さんの「船出」という詩です。

「病院のベッドで眼を見開いたままの従兄弟に／ほくはささやいた／ほくたち海賊にもならず／妻を娶り 家族を作りいたね／高く吊るされることはなかったけれど／いつのまにかほろほろになっちゃった／じゃ ひとあし先に／船出するんだね 船長／月も明るく、海は静かだよ」

従兄が事故で亡くなり、僕は出版社をつくって、素晴らしいたくさんの人たちに会いました。

この往復書簡は、その一つの証しのように思えてなりません。

また、仙台でお会いしましょう。どうか、お元気で。

『戦争が生んだ絵、奪った絵』を読んで

—終戦の八月に思ったこと—

鈴木 秀保

『戦争が生んだ絵、奪った絵』はシベリア抑留を体験し書いた画家（香月）と学徒出陣など学業半ばで戦病死した画学生の絵が紹介されている。共に印象深い諸作品であったが、長野県上田市にある「無言館」に二度行き実物を見ている（戦争が奪った絵）＝無言館の絵についての私の感想、思いを記したい。

「一度だけでいい あなたに見せたい絵がある」（窪島二〇〇三年）。画学生の絵の持つ魅力はどこから来るのか。彼らの絵のもつ不思議な生命力。今の職業画家には見ることができなくなった（ひたむきな創作活動）が伝わって来るからではないか。彼らは名声の為に描いたのではない。画学生にとって「絵を描くこと」がどれ程生きるバネになったことか。彼らが生きた時代を、絵を描くことによって、どう生きたのか。それは、戦争に直面した時、若者たち（画学生に限らず）がどう生きたのか、ということだ。出征の前に、絵をかけるのはこの時だけかもしれない。そんな時にどんな絵を描くのか。今生き

ている証としてどんなものを描いたのか、作品は語っている。彼らの絵は自分自身の青春の情熱から産み落とされた絵、今ここに生きている自分の生命を画布に刻みつけた自己表現の青春の意思力。絵に費やされた情熱。与えられた青春、という時間に一心不乱に絵筆をとり続けた彼らの「絵を描く」という行為。これらを全て出征によって奪い去られたという悲劇。今を生きる私たちが、彼ら画学生のように真剣に生きるということに対峙しているか、彼らの絵（無言館）では常に問いかけてくる。愛する家族、恋人、故郷の風景等、とても出征直前に描いたものとは思えない。あふれる生命の喜び、肉親への感謝が伝わってくる。彼らは戦争のことを「忘れて」、自分の思いを込め情熱と気持ちを込めて夢中に描いた。彼らが死なずに、思いきって好きな絵を描かせてあげたかった。だからこそ、無言館の一点一点の絵が語りかけてくるのだ。彼らは亡くなったが、彼らは絵の中で生きている。

彼らの絵の一点一点から、生きることの素晴らしさ、人を愛することの大切さ、が伝わってくる。一度と言わず見てほしい。「無言館」に行つて欲しい。

本書はとても読み易く見やすい編集になっている

## 『人生を変える本との出会い』

ある本との出会いが、人生を大きく変えるという事がある。本でなくても、映画、音楽、絵画など別に何であつてもよい。つまり、人はちよつとした切っ掛けで人生を丸つきり変えてしまうような事が起こりえると、言っているのである。

私の場合は無類の本好きであるから、切っ掛けを作るであろう本を、できる限り紹介したいと思つている。

ところが、読書習慣の無い人にくら「この本はい本だから読んでみては」と勧めても、「時間が無いから」という返事が多い。忙しいサラリーマンでも、通勤電車の中や、昼食後の休憩の十分、二十分という時間で文庫本の数頁は読めると思うが、それをしないだけなんだろう。

読書が嫌いという人に無理に勧める気はないが「少

ので、是非一読して欲しい著作です。

(五十九歳・学生)

※『戦争が生んだ絵、奪った絵』(新潮社とんぼの本・

野見山暁治、橋 秀文、窪島誠一郎著・一六八〇円)

片岡 英夫

しでも何か読んでみようかな」と思っている人に、北杜夫著『どくとるマンボウ航海記』をお勧めする。惜しくも、昨年十月に北氏は亡くなられたが、このエッセイのユーモアは、今のささくれ立った世の中では、一つの清涼剤となるのではないか。

かく言う私が、無類の本好きとなつたのもこの『どくとるマンボウ航海記』と出合つたからだ。それまでは、感想文を書くためのみに嫌々読まれた課題図書に辟易していた時に出合つたという事である。

ちなみに、嫌々読まされていなければ課題図書は、好きになつていたと今では思う。

(五十二歳・高校教員)

※『どくとるマンボウ航海記』(新潮文庫・北 杜夫著・

四二〇円)



## .....洋書の話 パート6.....



前回の予告とは違いますが、今回は急遽昨年末に東京代官山に開店しました大きな書店について、これは洋書の業界にとっても大きな出来事ですので感想を書いていこうと思います。代官山の旧山手通りに面した若者たち御用達の店が並ぶ一角に、その三つの館を持った代官山蔦谷書店さんは煌びやかに開店しました。普通の書店とは違い洋書と和書を見事に混在させた、どちらかと言うとビジュアル書中心のコンセプトショップです。

テーマによって三つの館に分かれ、かつ各館の中もジャンルごとに部屋があり（偶然ですが昨年訪店した台湾の誠品書店信義店を思い浮かべるのは私だけでしょうか）、店づくり、棚づくりに大きなこだわりを持っているようです。一つ目の館はどちらかと言うと和書中心で文学、人文、絵本、ビジネス書等が陳列されています。この部分に関しては普通の大手書店を期待してこられた読者にはちょっと違和感があるのは否めません。（その時は是非当社各支店をご利用頂ければ幸いです。）二つ目の館はアート中心で洋書もかなり目立ちます。中でも車の部屋は秀逸と言えるでしょう。三つ目の館は高級文具や料理

書ですが、ここでも旅行関係のコナーは是非一度訪れてみてください。ものすごいコンシェルジュがいっぱいいます。

金曜日の六時から七時頃訪店しましたが、雨にもかかわらず相当な人が入店されていました。目立つのが二十代から三十代の女性でした。人から聞いた話ですが蔦谷さんのターゲットは代官山のプレミア世代（五十代から六十代）だったとか。そのためコンシェルジュの方々もやや年齢の高い方もいらつしやるようです。目論見とは違った結果なのかもしれませんが、集客力があるのは良い傾向だと思います。今後品揃えも変わってくるのではないのでしょうか。

蔦谷さんですから当然音楽CDや映画DVDも豊富で、かつオンデマンドもできるとか。スターバックスや大きなラウンジもあり、ここでは選んだ書籍を持ちこめると何つております。三つの館をつなぐマガジン・ストーリーも迫力満点。暫く忘れていましたが書店ではあまりこだわらないビジュアルマーチャンダイジングの手法を取り入れたような魅力のある棚づくりがなされているような気がしています。日本建築でいうところの欄干を棚にし、

その棚の下を通って次の部屋へ行く時、その棚の本が気になります（実際は高すぎて手が届かないのはありますが）。また各部屋には二人から三人のコンシェルジュらしき男女がいて活発に働いていました。（ただ何となく人員配置には建物ことにはらつきがある感じがしましたが。）おそらく彼らは同時にバイヤーでもあるのでしょうか。このご時世にこれだけ大きなこだわりを持ち、かつ余計なお世話かもしれないが人が人件費的にも厭しそうな書店が開店できるとは。蔦谷さんの資力には驚くばかりです。特に洋書はほとんど直輸入とか聞いております。それもかなりな数。洋雑誌などはじみめの取次さんからの導入で驚きませんが、直輸入と言うことは買い切りであり、価格も抑え気味の様です。現在在る書店さんで例えば青山ブックセンター、リプロブックセンターの中のロゴスなどはかなり影響を受けるのではないかと心配ですが、洋書の業界にとっては新しい（潜在的な）顧客を開拓していくということでは非常にうれしいことです。

代官山蔦谷さんの今後の発展とご活躍をお祈りいたします。  
（洋書の髭）

# INFORMATION

≡ 旭川店 ≡  
☎(0166)26-1120  
〔営業時間〕10時～19時半

MARUZEN & ジュンク堂書店  
≡ 札幌店 ≡  
☎(011)223-1911  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 秋田店 ≡  
☎(018)884-1370  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 盛岡店 ≡  
☎(019)601-6161  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 仙台TR店 ≡  
☎(022)265-5656  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 仙台ロフト店 ≡  
☎(022)726-5660  
〔営業時間〕月～土10時半～  
20時半、日祝  
10時～20時半

≡ 仙台本店 ≡  
☎(022)716-4511  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 新潟店 ≡  
☎(025)374-4411  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 郡山店 ≡  
☎(024)927-0440  
〔営業時間〕10時～19時

≡ 高崎店 ≡  
☎(027)330-6611  
〔営業時間〕平日11時～20  
時、土日祝10時  
～20時

≡ 大宮ロフト店 ≡  
☎(048)640-3111  
〔営業時間〕10時半～21時

≡ 池袋本店 ≡  
☎(03)5956-6111  
〔営業時間〕月～土10時～  
23時、日祝10時  
～22時

≡ プレスセンター店 ≡  
☎(03)3502-2600  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 新宿店 ≡  
☎(03)5363-1300  
〔営業時間〕11時～21時

MARUZEN & ジュンク堂書店  
≡ 渋谷店 ≡  
☎(03)5456-2111  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 吉祥寺店 ≡  
☎(0422)28-5333  
〔営業時間〕10時～21時

≡ COMICS JUNKUDO 津田沼店 ≡  
☎(047)403-1911  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 藤沢店 ≡  
☎(0466)52-1211  
〔営業時間〕10時～21時

MARUZEN & ジュンク堂書店  
≡ 新静岡店 ≡  
☎(054)275-2777  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 岡島甲府店 ≡  
☎(055)231-0606  
〔営業時間〕10時～19時

≡ ロフト名古屋店 ≡  
☎(052)249-5592  
〔営業時間〕10時半～20時

≡ 名古屋店 ≡  
☎(052)589-6321  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 京都店 ≡  
☎(075)252-0101  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 京都BAL店 ≡  
☎(075)253-6460  
〔営業時間〕11時～20時

MARUZEN & ジュンク堂書店  
≡ 梅田店 ≡  
☎(06)6292-7383  
〔営業時間〕10時～22時

≡ 梅田ヒルトンプラザ店 ≡  
☎(06)6343-8444  
〔営業時間〕11時～22時

≡ 大阪本店 ≡  
☎(06)4799-1090  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 天満橋店 ≡  
☎(06)6920-3730  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 難波店 ≡  
☎(06)4396-4771  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 千日前店 ≡  
☎(06)6635-5330  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 西宮店 ≡  
☎(0798)68-6300  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 芦屋店 ≡  
☎(0797)31-7440  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 神戸住吉店 ≡  
☎(078)854-5551  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 三宮駅前店 ≡  
☎(078)252-0777  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 三宮店 ≡  
☎(078)392-1001  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 舞子店 ≡  
☎(078)787-1250  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 明石店 ≡  
☎(078)913-8201  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 姫路店 ≡  
☎(079)221-8280  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 岡山店 ≡  
☎(086)236-1877  
〔営業時間〕10時～21時

MARUZEN & ジュンク堂書店  
≡ 広島店 ≡  
☎(082)504-6210  
〔営業時間〕10時半～22時

≡ 広島駅前店 ≡  
☎(082)568-3000  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 松山店 ≡  
☎(089)915-0075  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 大分店 ≡  
☎(097)536-8181  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 福岡店 ≡  
☎(092)738-3322  
〔営業時間〕10時～21時

≡ 鹿児島店 ≡  
☎(099)216-8838  
〔営業時間〕10時～20時

≡ 那覇店 ≡  
☎(098)860-7175  
〔営業時間〕10時～22時

営業時間を変更する場合がございます。ご了承ください。  
定休日については、お手数をおかけしますが弊社HPまたは直接各店までお問い合わせ下さい。

## 投稿募集

☆読者の皆様の投稿を募集しています。最近読まれた本の感想文、本にまつわるエッセイ、など本に関するもの。最近読んでおもしろかった本、感動した本、考えさせられた本を教えてください。四〇〇字〜六〇〇字程度で、おすすめの本のタイトル、出版社、住所、氏名、年齢、職業を明記の上、お送り下さい。掲載分には二千円の図書カードを差し上げます。なお、原稿はお返しいたしませんのでご了承下さい。

☆尚、本誌掲載と同時に、ホームページにも掲載させていただきます。

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―1―151-5

ジュンク堂書店「書標」編集室係



作子台山

### 編集後記

今月の特集は「その日の前に」。三十年前から日本人の死因トップであるがんについて、専門医学書ではなく一般向けに書かれた書籍を紹介している。腫瘍が見つかり、それが良性ではないと言われる恐ろしさに、自分や家族は全く無縁だと言いきれる人はいないだろう。前触れもなく訪れる「その日」の前に、知っておくことは大切だと感じた。

(末)

### お申し込み先

〒171-0022 東京都豊島区南池袋二―1―151-5

ジュンク堂書店ジュンク特急便係

TEL 〇三―15956―1612

FAX 〇三―15956―1610

いつも「書標」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌定期購読料は以下の通りです。  
定期購読料 年間二二〇〇円（送料込）  
現金書留もしくは八十円切手十五枚で

パソコンから  
<http://www.junkudo.co.jp/>

携帯・MOBILE から  
<http://www.junkudo.co.jp/mobile/>



mobile QR コード



## バットとボールと 本屋の関係

二月一日プロ野球のキャンプイン。この日が来ると、今年もプロ野球の季節がやってきたと、ワクワクし、開幕が待ち遠しくなります。気の早い人は、鼠員のチームが今年は優勝間違いなしと優勝前夜祭を開いている人もいます。私も、自分の応援しているチームが強すぎて史上最短で優勝してしまつたらどうしよう……なんて妄想がふくらんでしまいます。

ファンにとつてはキャンプからシーズンが始まるものですが、選手にとってはキャンプから始めては間に合いません。キャンプ前のオフシーズンに、しっかりと体を休め、自主トレニングで体をしっかりと作っておかないと万全の状態で開催を迎えられないようです。たまに、オフシーズンにサボっていたのか、明らかに体重が増えていて体の動きが重そうな選手がいます。そして、たいていその選手の成績は芳しくないのです。やはり地道な積み重ねでしっかりとした土台を作らないとダメなんです。

でも、これはプロ野球に限った話ではなく、私たちの普段の仕事や日常でも同じことが言えます。普段から、漠然と業務をこなすのではなく、目的意識を持って地道に業務にあたること。いざという時にアタフタと慌てないように、スケジュールを立てて、事前の準備にしっかりと時間を割くこと。大切なのは分かっていますが、これがなかなか続けていきません。手を抜か

ずにこれ続けていける人が、一軍でレギュラーを獲得し、毎年成績が残せるのだと思います。毎日しっかりと手を加えて書棚を管理しなければ一軍の棚は作れません。ブックフェアやイベントの準備がおざなりだとホームランは出ません。三振か、よくてポテンヒットが関の山です。出会い頭のホームランではなく、求められるのは安定した成績。みんなで一軍レギュラーに定着できるように実力をつけて、ご来店のお客様に満足してもらえるような店にすべく頑張つていきます。

……と格好のいいことを徒然と書いてきましたが、実はこの原稿を書いているのは原稿締切日の前日。一ヶ月以上前に依頼されていたのに……。こんなことをしていると、私が二軍に落とされてしまいそうです。反省します。

(範)

「書標 ほんのしるべ」 第399号

二〇二二年二月五日発行 頒価五十円(本体四十八円)

編集・発行人

岡 充孝

発行所

(株)ジュンク堂書店

〒650-0021

神戸市中央区三宮町一ノ六の十八

印刷所

(株)七

旺社

〒653-0013

神戸市長田区一番町二丁目一

TEL

(〇七八) 三九二一〇〇一  
(〇七八) 五七五一五二二二

